

TYPE OF INDUSTRY

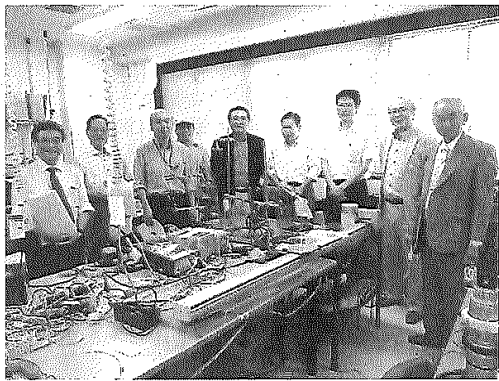
東京都大田区は五つの農業種交流団体を中心とする大田区農業種交流グループ連絡会は、2013年から山形大学の国際事業化研究センターと連携し、同大学の研究者と「顔合わせ会」を行っている。夏には大田区内企業が山形大の研究室を、春には研究者が区内企業を見学し、夜は懇親会を用意。事前に信頼関係を構築し、産学連携が成立しやすい体制づくりを目指す。(南東京・門脇花梨)

◇

相互訪問で交流
「大学の研究は本来機密事項で、企業の困っていることは弱み。見せたくない部分を見せ合える信頼関係を築かなければ」と話すのは共立理化学研究所(東京都大田区)の岡内完治会長。15年以上前から全国各地の大学と連携して製品開発に取り組んでいる。ただ、苦い経験も積

山形大 産学連携 「信頼」地ならし 大田区

見学会生かし課題解決



山形大で行われた大田区企業向け研究室見学会

洋塗料(同)と共同研究を進める。

実験は塗料をガラスに付着させ、電界をかける方法で行う。太洋塗料はフィルムが出来を確認しやすい塗料は、はがれやすい塗料を提供する。

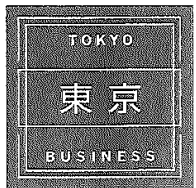
同社取締役の神山麻子技術部長は「この技術は工業塗装にも応用できる。塗料を塗る際、電界をかける装置を作れば塗膜の厚みを一定にできる」と明かす。現在、ある装置メーカーに装置製造を依頼している。共同研究は両者にメリットをもたらしている。

放送設備・関連機器の設計・製造を手がけるスター・テック(同)の澤口進社長は、窓口である国際事業化研究センターを積極的に利用する。丈夫で太陽の

んできた。モノづくり使わず静電気を除去するが始まる前に権利関係る機械の開発に挑んでもめて、連携が直前で頓挫したこともあるという。事前に信頼関係を構築してトラブルを避けるべく、「顔合わせ会」を始めた。同社は現在、同会で知り合った山形大大学院理工学研究所の杉本俊之准教授と、粉末を袋に封入する際、風を

異分野の研究者も紹介

中小企業・地域経済



南後淳准教授に協力を要請中だ。澤口社長は「以前見学会で当社のリグを見せた際、アドバンスをくれて課題を解決できた。また力を借りたい」と意気込む。製品化を円滑に

研究を利益に変えるには、製品に落とし込むなどの一手間が必要。その点、市場ニーズと大学の技術をマッチングできる産学連携は効率がいい。ただ、大学は研究内容の機密

さらにはカメラなどの撮影機材を安定させるための懸架システム「リグ」に関しても、課題を解決するために同センター経由で同大学院理工学研究所の例も多い。岡内会長。成功のキギは意外にも連携前の行動にあるのかもしれない。



大田区の工場アバートテクノWINGを訪れた山形大学の研究者ら